

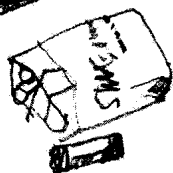
法医学

の午後 教室

西丸與一



法医学教室 の午後



西丸與一

西丸與一（にしまる よいち）

昭和2年，東京生まれ。横浜医科大学
卒業。医学博士。現在，横浜市立大学
医学部法医学教室主任教授，医学部長。
昭和30年から神奈川県監察医。神奈川
大学法学部講師。日本法医学会理事，
ほか。

法医学教室の午後

定価 一二〇〇円

一九八二年十一月三十日第一刷発行
一九八三年六月十日第九刷発行

著 者 西丸與一

発行者 初山有恒

印刷所 明善印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地五ノ三ノ二
電話 〇三―五四五―〇一三一（代表）
編集・図書編集室 販売・出版販売部
振替 東京〇―一七三〇

法医学教室の午後 目次

霧笛の夜 7

事件は水もの 15

名前のない子 24

偽装心中 32

美しい妹 41

生きとし生けるもの 49

事故死と病死 57

野暮な話と粋な人 63

苦い酒 72

約束 81

懐かしい人々 88

火葬場の予言者、南に行く 98

はにわりの人 107

死者からの手紙 115

戻ってきた事件 124

とかくお酒というものは 133

調子がくるう話 141

密輸エレジー 149

罪のない女 156

父と子の間で 164

Kの死 173

血を合わせる話 181

或る捜査 190

美しい業を見た 199

白い毒薬 210

推理小説と法医学の間で 219

高瀬舟 229

死とのむなしい対話 236

あとがき 247

A 装幀
D 村上 豊
熊谷博人

法医学教室の午後

霧笛の夜

夜にはいると、雨は少しおさまり、霧が出始めた。白っぽい幕が、静かに流れ動く。
港のほうで、何度も霧笛が鳴った。

こんなとき、医学部の二階にある私の部屋から窓越しに、ぼんやりと運河を眺めているのもよいものである。ネオンの色が、赤や青にくずれてにじみ、みんな美化されて、水面にできる無数の小さな輪は、その下にすべてをかくし、そして、沈めてしまうように見える。人間の社会もそうなのだろうか。

遠くから表面だけを見ていれば、すべて平和で、美しいのかもしれない。

夜霧の運河は、私をふとそんな感傷におとし入れる。

一階にある監察医務室から、遺体が到着したという連絡が入った。若い女性の死体である。
『さあ、解剖だぞ』と自分に言いきかせて、煙草に火をつける。

また、死という現実と向い合うのである。助手のA君の部屋に声をかけて、私は暗い廊下を、解剖室にむかって歩き出した。

——五月は末、細かい雨が絶え間なく降る日であった。

港に面した公園で、全身ずぶ濡れになって死亡している女性死体が発見され、とりあえず、遺体は、大学に向って搬送中という第一報が入っていた。

その女性は二十歳くらい。濡れた顔が若く美しかった。なぜ、死んだのであろうか。まず、死因を決める役目が私に回ってきた。

解剖室のライトの下で、照らし出された白い身体がまぶしかった。長い髪の毛が印象的である。静かな眠り、そんな言葉があてはまるような安らかさがあった。

解剖をしながら、当直の主任さんに聞いてみた。

「この人の身元はわかっているのですか」

「はい、割れたようです。本署のほうで親元に連絡をとりましたから、もうこっちに向っていると思います。所持品のハンドバッグに、手帳かなにかがあったらしいです」

「遺書は？」

「それはなかったようです。しかし、手帳になにか厭世的なことが書かれていたようです。私は現場に行っていないので、見てませんが、捜査のものが、そんなことを言っていました」

「独身ですか？」

「いやあ、それは分りません」

解剖に要した時間は、約二時間十五分であった。

結果として、薬物中毒死であることが判明した。多分催眠剤であろう。胃の中に白い粉末が多量にとけて、残っていた。自殺か、あるいは薬の飲み過ぎか、その辺については、まだ判然とし

ない。化学検査の定量的な検査結果を待つことにする。

極端に多い量の催眠剤が検出されれば、やはり自殺と判断せざるを得ない。また、死亡している場所などからも、ある程度の推測はできるであろう。

これらの所見のほかには、外傷や、病氣らしいところは、どこにも見出されなかった。ただ各臓器にうっ血が強く、心臓や肺臓の表面には、小さな点状の出血点が、多数見出された。また、肺には薬で意識を失ってから発生したと推定される嚔下性肺炎の症状が顕著に認められる。そして、彼女は、まだ完全に独身であると言えた。

なんの薬を、どのくらい飲んだのか、それは化学検査を待たなければならぬ。いまは、とにかく、薬物中毒死ということである。

後の処置をA君に依頼して、私は解剖室を出た。例によって遺体を火埋葬するための書類を作成しなければならぬ。解剖中にかけてつけた捜査の主任さんが作ってくれた事件概況に目を通す。姓名、本籍、現住所などは、それぞれの欄に書き込まれていた。しかし、生年月日の欄は空白であった。

「主任さん、この人の生年月日は分りませんか」と聞くと、

「それが、ちょっとはつきりしないんです。さっき本署で、父親と電話で話したのですが、なんだかはつきりしないんです。年は二十二歳だと言うんですが……」

「それじゃあ、あとでお父さんが来たら聞いてみましょう」

「それが先生、変なんです。二十二歳であることは、間違いないと言いますが、生年月日はよく分らないと言ってます」

「ほお！」

「とにかく遺体の確認もありますし、大学へ来てくれるように頼みました。もうそろそろ来ると思いますが、来ましたらもう一度聞いてみます」

私は生年月日がわからないということについて、あまり深く考えずに、書類を作成し始めた。死体検案書、解剖報告書。それは死者のレポートである。

ちょうど書類が出来上がるころ、父親が到着した。白いものが混ざった髪を短く刈った、その父親の印象は、私とその娘の死体からいだいていたイメージとは、なにか喰い違っているように思えた。われわれの仕事は感情で動くべきではないと思うが、なぜかそう感じられたのであった。遺体の確認を終えた父親が、再び監察医務室にもどってきた。

「お嬢さんに間違いありませんか」

「間違いありません。ご面倒をおかけしてすみませんでした。あんな死に方をしなくてもいいのに……」

と言って、眼がしらをおさえていた。

「ところで、お嬢さんの生年月日は、いつですか」

「わからなきゃ、いけないんでしょうか」

と少しおどおどした様子で答えた。

「いけないというわけではないのですが、書類を作るのに必要なのです」

「困っちゃったなあ、はっきり覚えていないんです」

「ああ、それならあとでも結構です。あるいは、いますぐにでも奥さんに電話をして聞いてみて

くださいますか」

私は、母親なら覚えているだろうと思ったのである。すると、その父親は、ぶっきらぼうに、

「女房はいないんです」と答えた。そして、

「どこで、なにをやってるんですか……」

とつけ加えた。

「それはすみませんでした。嫌な事を聞いてしまいましたね」

「いや、いいですよ。昔のことですから……」

結局、生年月日は、その父親では分らなかった。とかく、男親というものは、なにもわからないものだと思つてみたが、やがてそれがまったく違う憶測であつたことが、わかつてきた。それは、この娘さんが生まれたとき、出生の届けを出していなかつたというのである。したがつて、いつだったか、いまとなつては覚えていないということであつた。

それを聞いて、今度はわれわれのほうがあわてる番であつた。戦後、孤児になつた子供を引き取つた場合などに、生年月日が戦災のために不明であるというような例を聞いた事があるが、この場合は、それとも違つていた。

「出生届を出してないとすると、この娘さんの籍はないわけですか」

「どうもそういうことになるようなんです……」

私は、あきれるというよりも、むしろ腹がたつてきた。捜査主任たちも、いささか頓狂な声を出して、

「おいおい、おやじさん。そりゃあ本当かい。しつかりしてくれよ。冗談じゃないんだから……」

としゃべり出した。

「なんで届けを出さなかったんだね。それじゃあ、娘さんがかわいそうじゃないか」

「へえ、すみません。女房はいなくなっちゃまし、届けを出さなきゃいけねえ、いけねえと思ってるうちに、こうなっちゃったんで……」

私は、ただ啞然としていた。いけねえ、いけねえと思って二十二年間も！こんなことがあるのだろうか。私は思いついたことをつぎつぎと質問してみた。

それによると、小学校も中学校も卒業したというのだから、わからない。まず小学校のときであるが、『学齢期になったときは、毎日どうしようかと思っていた』そうである。近所の同じ年ごろの子供たちが、親にランドセルを買ってもらい、喜んでいるのを見て、この子も、ランドセルを買って欲しいとせがんだ。仕方なくランドセルを買ってやると、早く学校に行きたいと言って、はしゃいでいたという。入学のときがきたのに、この子には通知が来なかった。それは、当然のことであろう。

しかし、小学校の入学は、父親の表現をかりると、『先生に頼みに行ったら、入れてくれた』そうである。私にはよくわからないが、父親がそう言うのだから多分事実なのであろう。どのように頼んだのかを聞いてみたが、あまり要領を得なかった。『なにしろ、ずいぶん前のことだから……』とか、『子供が、かわいそうだからと思って、一所懸命頼んだ』といった調子である。

そして、無事に小学校は卒業した。中学のときは、もっと簡単だったという。義務教育というシステムが、そうなのか、私にはなにか釈然としないものが残ってしまった。

この父親の様子を見ると、実直そうな人ではあるし、本人としては真面目に話しているよ

うで、人をかついでのでもなく、嘘を言っているのでもないらしい。

警察の主任さんたちは、私と父親のやりとりを聞いていて、途中からは、ただもう「へえー」とか「ほうー」とか、「驚いたね、どうも」などと感嘆詞の連続であった。

私が、取り扱った事件に、やはり出生届を出していなかった少年がいたが、それは確か八歳ぐらいであったと記憶している。それにしても、二十二年間も、そうして生活できるものかと、今さらのように驚き入ってしまった。

都会の盲点なのか、恐ろしさなのか、そして人間一人とは、そんなに小さいものなのだろうか。それにしても、この父親は、なぜ、届けをしなかったのであろうか、これも不思議なことである。愚痴のように、何度も聞いては見たが、答えは一つ、「届けよう、届けようと思っていて、つい……」であった。

この父娘の間で、籍の問題は、今までに一度も出なかったし、話し合ったこともなかったという。しかし、今回の謎の死の前してみると、本人はやはり知っていたのではないかと推測できる。幼いときに、母親に去られ、父親と二人の生活が続いた中で、この娘さんは、この世に存在しない人として、どう生きたのであろうか。

私は解剖台に横たわった白い人を思い出した。ここまで立派に成長していたのに、と思う。運命の歯車が、どこかで一つ狂ってしまったのだろう。無知とも思える父親も、その娘も、そのまま回りつづけてしまったに違いない。

それでも、あの娘が生甲斐だったといい、目をしばたく父親に、こんな簡単なことをなぜやらなかったのかと、今さらどうにもならないいらだたしさと、あわれを感じて、私は無口になって

しまった。

捜査主任に依頼して、署に保管されている手帳の内容を問い合せてもらった。

そこには、男性の名前も書かれてあったようである。一緒になろうと言われたこと、自分も結婚したいと思うなどと書かれていて、また別のところに『あのことだけは、どうしても彼に言えない』とか、『死んでしまいたい』という記載が、見られるということであった。

彼女が、どうして死を選んだのか、はっきりとしたものはない。あのこと、とはなにを意味しているのだろうか。籍の問題を指しているとも考えられる。もし、そうであれば、なぜ誰かに相談できなかったのであろうか。本人の考えを聞けない今、私の思いも空転してしまう。誰かに相談でもしていれば、解決がついていたのかもしれない。

死を選んだ理由が、この問題だとすれば、まことにあわれな物語である。

しとしとと降っていた雨の中で、公園の芝生の上で、葉を飲みながら、永い眠りにつくまでに、彼女はなにを考えたであらうか。

関係者が引きあげて帰ってしまったても、なぜか、しばらくは、坐っていたかった。暗い気持だったのである。窓をあけると、外は、まだ小雨が降りつづいていた。

暗い夜に、また霧笛が鳴った。